佳作賞

表現力を高めるための「対話的な活動」の工夫
―ピクトグラム制作を通して―

概要

本研究は、表現力を高めるため、ピクトグラムを題材に、制作の全過程に対話的な活動を取り入れたものである。そして、対話的な活動方法を工夫することで美術的な「見方・考え方」が十分に働き、深い学びにつながることを目指す。対話を促すための手立てとして、制作過程に鑑賞活動を複数回組み込むこと、ワークシートの工夫を行うこと、学習のまとめとしての相互鑑賞を工夫することの3点を行った。

本研究は、平成29年に、主題に基づいて班でアイデアをまとめながら一つのピクトグラムを制作する共同制作から始まった。しかし、その際に一部の生徒がアイデアを練る段階で手が止まってしまう様子が見られた。このような生徒の振り返りの記述には、「何をどう表せばよいかわからない」、「イメージしたことを形にできない」ことが原因で構想に時間がかかり、活動に消極的であったことがわかった。

そこで、平成30年度から個人制作へ移行し、2年に亘って構想段階のワークシートや鑑賞活動の取り入れ方を見直し、改善を重ねた。制作活動の中に、表現力を高めることをより鮮明に意図した対話的な鑑賞活動を複数回取り入れることで、学びを深め、生徒の表現力を向上させることとした。その手立てとして、授業の全体計画の中に鑑賞活動を意図的に取り入れた構成にした。また、制作時に自作品のアイデアの変化を感じ取れる比較鑑賞を容易に行えるようワークシートを工夫し、デザイン上のポイントを実感させながら本制作につなげられるようにした。まとめの鑑賞活動では、班活動から学級活動へ、さらに全校での鑑賞活動を経て実際に校内のピクトグラムとして作品を掲示する活動を行った。本研究は、これらの手立てから生徒の学びが深まり、表現力が高まっていった様子を「生徒の様相からの分析」としてまとめたものである。

岡本（おかもと） 真梨（まり）

勤務先：新潟県長岡市立南中学校　教諭

出身校：大分大学教育学部　中学校教員養成課程美術専攻

1　主題設定の理由

平成29年に告示された新学習指導要領では、生徒が身に付ける資質・能力が、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう人間性の三つの柱として整理された。そしてそれらの資質・能力を身に付けるために、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を推進することが求められている。

しかし、筆者は美術科の授業を行っていく中で、生徒の意欲的な姿勢や感想の伝え合いがその場限りのものとなっており、教科の目標の一つである「表現力の高まり」に十分につながっていないと感じていた。また、表したいものを表せずにいる生徒や、主題を深く考えるに至らない生徒なども少なからず見られた。そのような生徒たちにもデザインを通して自分の思いを伝え、表したいことを表現できるような支援をしたいという思いから授業実践を行った。

生徒が、発想に時間をかけすぎたり、制作の手を止めてしまったりする場合、どのような視点で主題を捉え、発想していけばよいかが、不明確なままであることが多い。そのため、対話的な活動を複数回取り入れ、視野を広げたり他者のアイデアから学んだりする機会を増やすこととした。対話的な活動が、対象をより深く見つめたり、自分の思いや価値をつくり出したりすることを促し、表現力が高まるのではないかと考えた。

同指導要領解説によれば、「深い学び」の鍵は「見方・考え方」を働かせることが重要とされている。そこで、本研究を通して「見方・考え方」がより働くように、生徒の対話活動を工夫することとした。授業を行う際は、生徒が表したいことを試行錯誤し、さまざまな技法を取り入れたり表し方を工夫したりしながら作品を完成させ、表現力を高めることが目標となる。

そこで構成がシンプルで対話の糸口がつかみやすいピクトグラムを題材とした。ピクトグラムは、今後さらに公共デザインの重要性が増していくという社会的背景や、生徒にとって身近で考えやすいものといった、興味関心を引きやすい題材でもある。さらに、そのシンプルな形や色の構成から、誰もがわかりやすいデザインを追究させる活動を通して学習課題が明確になり、生徒の表現力を高められる題材であると考えた。

2　研究内容

本研究は、「校内ピクトグラム計画」と題し、校内の特別教室のピクトグラム制作を通して生徒の表現力を高めることを目指す。その手立てとして、対話的な活動を各制作過程に設定した。その過程において、制作に対する苦手意識が強い生徒や構想に時間がかかる生徒等を抽出し、手立ての有効性を検証することで成果と課題を考察する。

（1）本題材の目標

形や色彩などの造形要素の働きを生かし、伝える相手や場面などに応じて、より効果的に伝えるためには何が大切かを考え、デザインを構想し表現する。

（2）指導計画の工夫

【第2学年対象・全7時間】

第1次　導入（1時間）

（a）過年度生の試作品による比較鑑賞
（学習課題の理解）

（b）白黒反転の効果を表す動画による比較鑑賞
（白黒反転効果の理解）

（c）実感ワークシートによる比較鑑賞
（実際に描く体験活動）

第2次　構想（2時間）

（d）試作品①と相互鑑賞による振り返り
（発想、構想の深まり）

（e）試作品②と比較鑑賞による振り返り
（発想、構想の深まり）

第3次　表現（3時間）

（f）制作途中における相互鑑賞
（進捗状況確認、表現の高まり）

第4次　まとめ（1時間）

（g）作品完成後の相互鑑賞
（他者理解、自己有用感の高まり）

※相互鑑賞、比較鑑賞は、本来ならば厳密に区別はできないが、便宜上2つに分けて提示した。

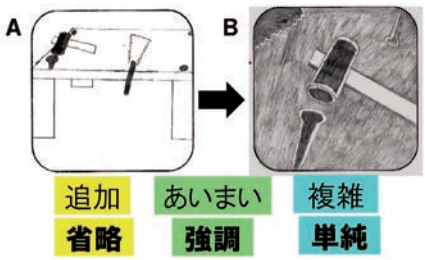
本研究における2つの鑑賞の捉え方は以下の通りである。

相互鑑賞

生徒が自分の作品にのみ目を向けるのではなく、他者の発想から学んだり構想について新しいアイデアを得たりする活動。

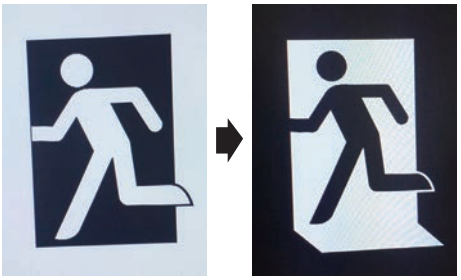
比較鑑賞

生徒が学習のポイントを理解して制作できるよう、自分の考えの変化や他者から学んだことを実感しやすくする活動。



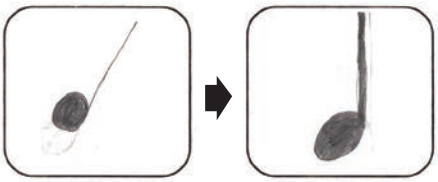
【生徒の発表】
- 「Aはいらないものが多すぎて複雑だが、Bは必要なものを単純にしているのでわかりやすくなった」
- 「Aは全体を表現していてあいまいな感じでわかりにくい。Bは一部を切り取って強調することで見やすくしている」

図1：過年度生の試作品のスライド



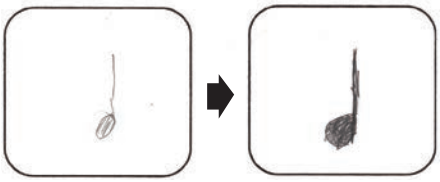
【授業での対話の様子】
教師：動画では、Aのままだと逃げている人が暗闇に飛び込んでいるみたいで不安な感じがすると言っていましたが、どのようにしたらよいでしょうか。
生徒：白と黒を逆にする。
教師：では、動画の続きを見てみましょう。（動画を流すとBが出る）
生徒：おー！すごい。
教師：どこがすごいかな？
生徒：逆にしただけなのに印象が全然違う。
生徒：白と黒だけで絵を変えられるのがすごい。

図2：白黒反転したマーク



- 初めに描いたデザインは、モチーフが右に大きく傾き、音符の軸が1本線で描かれている。
- 比較鑑賞後の右のデザインでは、大きく力強い線で描いている。

図3：実感ワークシート



- 左のデザインは、やや右に寄り、全体的に弱々しい線で描かれている。
- 比較鑑賞後は、モチーフを中央に描き、濃く、はっきりとした線で描いている。

図4：実感ワークシート

（3）指導方法の工夫

①第1次：導入「3つの比較鑑賞」

（a）過年度生の試作品による比較鑑賞

ピクトグラムの制作上、必要となるデザインの工夫とは何かを考えさせるため、過年度生の試作品で比較鑑賞を行った（図1）。1度目の試作品をA、2度目の試作品をBとし、スライドで両試作品を比較して気付いたことを発表させた。その際、造形要素のポイントとなるキーワードを対比させて提示し、生徒にどこがどのように変化することでよりわかりやすいデザインになったかを考えさせた。

（b）白黒反転の効果を表す動画による比較鑑賞

色彩の変化による視覚的効果を実感させやすくするために、NHK Eテレ「デザインあ」より非常口のマークを題材にした動画を生徒に視聴させた（図2）。その際、動画を区切って見せ、白黒の反転を行うことで、作者の意図した効果的なデザインが完成する様子を感じ取らせた。

（c）制作前の体験学習（実感ワークシートによる比較鑑賞）

実際にピクトグラムを描く際は、線の太さやモチーフの大きさなどのバランスが重要であり、生徒にはそれらを実感させる必要がある。そのため、制作前に実感ワークシート（図3・4）を用いて、音楽室のピクトグラムを例に四分音符を描かせた。初めに個人で描かせた後、周囲の生徒同士で比較鑑賞を行い、再度同じ課題に取り組ませると、制作に苦手意識をもつ生徒を中心にデザインの変化が見られた。これにより、構想前に実感ワークシートを用いることで、生徒は見やすいデザインの工夫を周囲から感じ取りながら、制作上のポイントの理解を深められると考えた。

②第2次：構想「試作品づくりと2つの振り返り」

ここでは2枚のワークシート（28ページ・図5）で段階的に構想を練りながら、自他との対話を通した鑑賞活動を行う。その鑑賞活動それぞれで振り返りを行い、自分がどのような作品をつくりたいか、構想を深めていく。ワークシートには3つの工夫がある。

- 2枚とも枠を同じにし、試作品①のシートの上に②のシートを重ねることでモチーフの位置や大きさを簡単に調整することができ、表現したいことをより強く意識できるようにした。
- 試行錯誤しながら自分の意図したデザインに近付けられるよう、試作品①の相互鑑賞から感じ取った自作品の改善点を記述できるようにした。
- 本制作への意欲を高めるため、試作品①と試作品②の比較鑑賞（自作品）を通して気付いたことの振り返りを記述できるようにした。

写真１：相互鑑賞後、試作品②に取り掛かる生徒

写真２：比較鑑賞後、再度配色を確かめる生徒

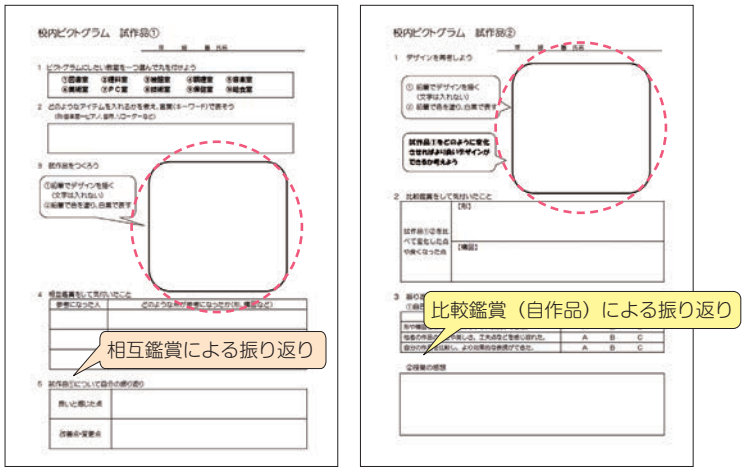


図５：制作ワークシート（令和元年度実施）（左：試作品①　右：試作品②）

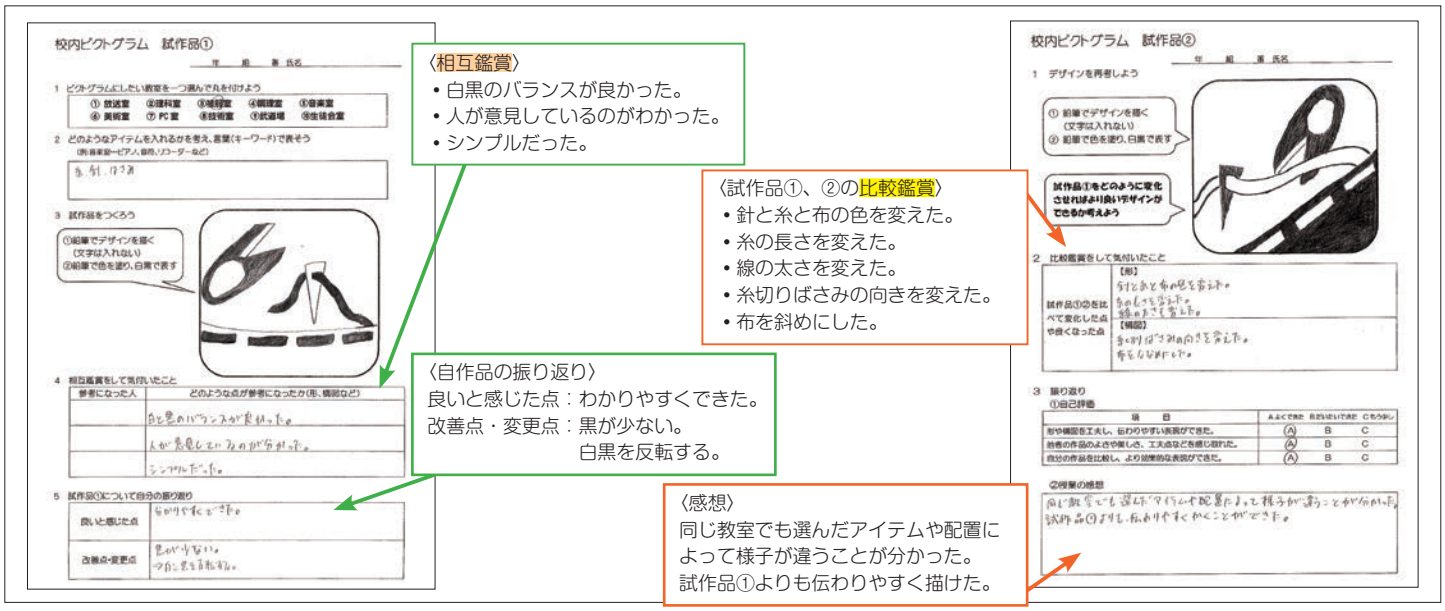


図６：生徒Ａ（平成30年度）のワークシート【被服室】（左：試作品①　右：試作品②）

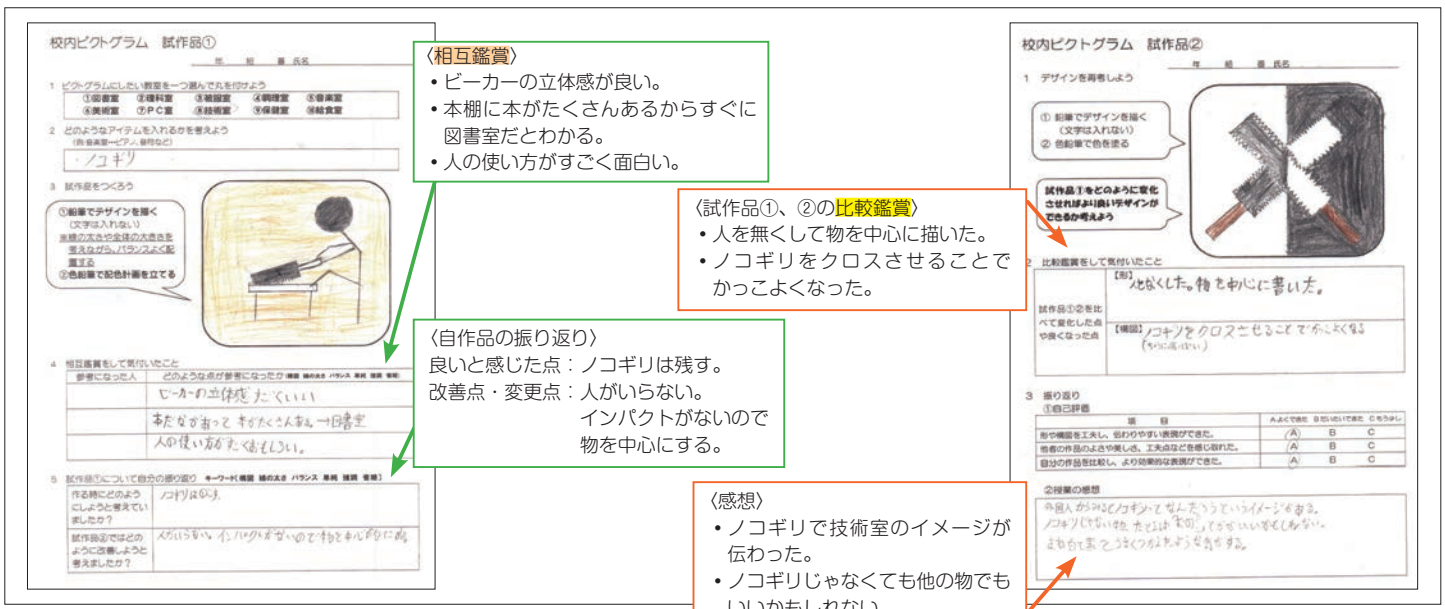
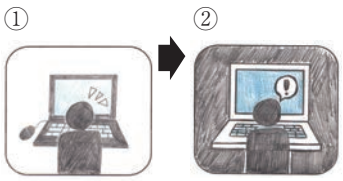


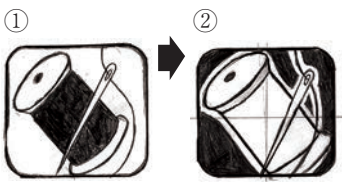
図７：生徒Ｂ（令和元年度）のワークシート【技術室】
（左：試作品①　右：試作品②）



【試作品①】
- わかったり、気付いたりする表現方法を模索した。漫画でよく使用される表現を参考にした。
- パソコンらしく描くため、マウスを描き、実際のパソコンの色にした。

【試作品②】
- パソコンで調べてわかった様子を強調するため、吹き出しとマークで使って表現した。
- 視認性を高めるため、背景を黒色にし、パソコンを白く大きく描いた。

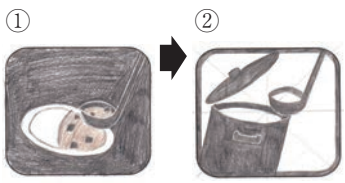
図11：Fの試作品【パソコン室】（令和元年度）



【試作品①】
- 針に糸を通す様子を描き、被服室でいつも製作を始める様子を描いた。
- 針の銀色をどう表すかを悩んだが、糸の色を濃くすることで針の存在を際立たせた。

【試作品②】
- 全体の存在感を更に強調させるため、モチーフをより大きく断ち切って描いた。
- 学校の白い壁に貼ることを考え、視認性を高くするために白黒を反転させた。

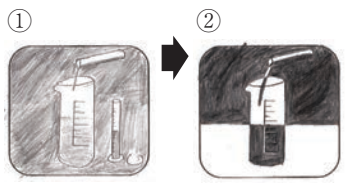
図10：Eの試作品【被服室】（平成30年度）



【試作品①】
- 給食の定番の献立であるカレーをモチーフにした。配膳している様子をデザインに取り入れた。
- ご飯の白を際立たせるため、背景を黒色にした。

【試作品②】
- 給食室をイメージしやすいように、カレーライスから調理器具に変化させた。
- より伝わりやすく表現するため、背景を白色にし、モチーフを黒色で表した。

図9：Dの試作品【給食室】（令和元年度）



【試作品①】
- モチーフのビーカーやメスシリンダー等を配置し、理科の実験時の様子を描いている。
- 理科室の暗幕と液体の色を同時に塗って表現している。

【試作品②】
- よりシンプルに表現するため、モチーフの数を減らして主役を目立たせた。
- 視認性を高くするため、黒色が多かったデザインに白色を配置し、効果的に表現した。

図8：Cの試作品【理科室】（平成30年度）

【試作品を作り終えた生徒の感想】（写真1・2）

- 大きさを少し変えたり位置をずらしたりすると印象が変わることがわかりました。
- クラスの人のピクトグラムを見て、白と黒のどちらをどこに塗るのかが参考になりました。
- 町の公共施設等で使われているピクトグラムは誰が見てもわかるような形で表現されていて、今回自分でつくってみて、とても奥が深いと思いました。
- 簡単な絵で相手に伝えることができるピクトグラムは、良いものだと思いました。

【生徒の様相からの分析】

（ア）制作に対して苦手意識が強い生徒について

○生徒A（平成30年度）（図6）

Aは、丁寧に制作をする生徒だが、苦手意識が強く自身の思うように表現できないと振り返ることが多い。今回、自分の試作品の良い点や改善点を具体的に振り返ることで、初めは白地が目立ち視認性が低い状態のデザインが、試作品②では図面の濃淡が際立ち内容の訴求力が高まっている様子を見ることができる。

○生徒B（令和元年度）（図7）

Bは、苦手意識やこだわりが強く制作途中に手が止まってしまうことがあるが、今回の相互鑑賞を行う中でデザイン上のポイントを理解し、試作品②につなげることができた。試作品①ではピクトグラムとしては視認性の低いデザインだったが、試作品②では、モチーフの配置や大きさ、色のバランスなど様々な造形要素を取り入れながらより伝わりやすいデザインを意識して制作している。

（イ）構想に時間がかかる生徒について

○生徒C（平成30年度）

C（図8）は、いつも描きたいことがまとまらず、構想に時間がかかる傾向にある。しかし、試作品をつくり鑑賞を段階的に行うことで、時間内に構成要素である白黒の配置を工夫し、作品のバランスを整えることができた。

○生徒D（令和元年度）

D（図9）は、何事にも慎重に行動し、じっくりと物事を考える生徒である。いつもは自分の考えのみで時間ばかりが過ぎてしまうことが多いが、鑑賞を重ねることで、より他者に伝わりやすいデザインを意識して制作することができた。

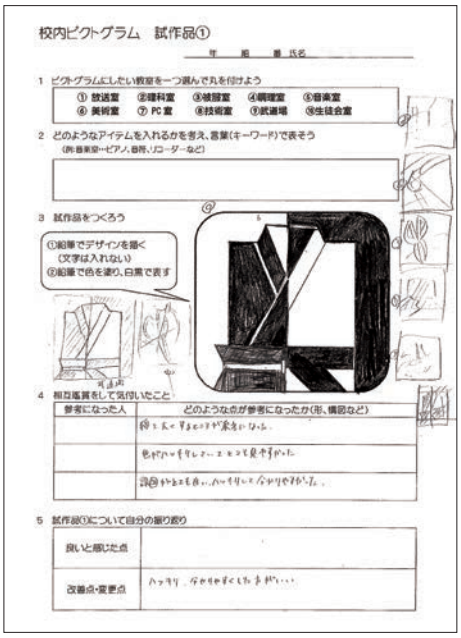
（ウ）独自の工夫が見られた生徒について

○生徒E（平成30年度）

制作への意欲が高いE（図10）は、構図を決めた後、実際に掲示する場所の壁の色を想定して背景を黒にすることで目立つ配色にした。

○生徒F（令和元年度）

同じく制作意欲が高く、十分に構想を練



ハサミやパソコン等のスケッチが見られ、どの特別教室をデザインするのか試行錯誤している様子が見られる。

試作品①から白黒を変化させて様々なパターンを描き、繰り返し試行錯誤している様子が見られる。

【感想】
シンプルでわかりやすいように描きたいと思いました。クラスの人たちの作品がわかりやすかったので頑張ろうと思いました。

図12：Gの試作品【武道場】（平成30年度）
※剣道着、柔道着を基にしたデザイン

り丁寧に作品を仕上げるF（29ページ 図11）は、パソコン室で調べものをしてわかった時の様子を表現するため、試行錯誤を繰り返し、デザインを決定した。

（エ）デザインの変化が見られなかった生徒について

ワークシートや鑑賞活動の工夫を行ってきたが、中には試作品①と②のデザインに大きな変化が見られない生徒もいた。初めから試作品①のデザインに迷いがなかった生徒は、相互鑑賞後に大きさや位置を多少変化させるのみに留まった。デザイン自体に変化はなくとも、生徒が頭の中で試行錯誤した様子は、試作品のデザインだけでなくワークシートのスケッチ、記述内容や発言等からも見て取れた。図12は、試作品のデザインに大きな変化がないものの、様々な試行錯誤を行っている生徒Gのワークシートである。

③第3次：表現「制作途中における相互鑑賞」

下書き、着彩などの本制作途中において5分程度の相互鑑賞を行った。これにより、制作上の工夫を感じ取らせたり、進捗状況を確認したりすることができた。この活動は毎時間機械的に行うのはなく、生徒の様子を見ながら、生徒が制作について迷っていたり、進度に差が大きく見られたりする時などに取り入れた。相互鑑賞後は、試作品からケント紙への拡大作業時の際に、モチーフの大きさ、位置、全体のバランスの確認をし直す生徒や、試作の段階では気付かなかった配色について、セパレートをする、白を混ぜて明るさの調整をするなどの工夫が見られた生徒がいた。なお、完成後は、作品下部に制作したピクトグラムのPR文を書かせた。

④第4次：まとめ「作品完成後の相互鑑賞」

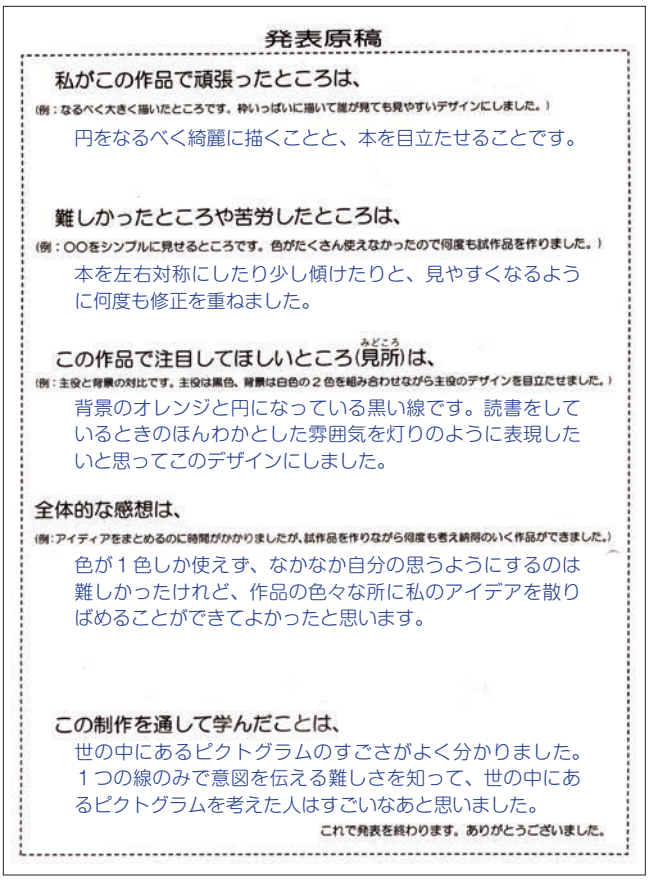
作品完成後は、班や学級で相互鑑賞を行い、本題材を通して考えたことや工夫したことについてワークシートにまとめる。その後、校内へと鑑賞の場を広く移してしていくことで、より広い視野でより多くの対話を行わせた。

（a）班鑑賞

まず、発表原稿（図13）を記入させながら学習を振り返らせる。振り返りを確実に行うことで、この後の鑑賞で他者の作品に対する見方や考え方が深まると考えた。その後、4～5人程度の班になり、自作品を見せながら順番に発表を行う。

さらに、完成した作品と相互鑑賞ワークシート（図14）をセットで班員に回し、手元でじっくりと鑑賞しながらメッセージを記入させた。生徒が最後に自分の手元に作品が戻ってきた時には、班員からの鑑賞メッセージがワークシートに記入されており、自分では気付かなかったデザインのよさに気付けるようにした。

班での相互鑑賞時には、作品についての疑問点などを何でも聞いてみる質問タイムを設けた。すると、「何で図書室にオレンジ色を塗ったの？」「図書室は優しくてあたたかい感じの空間だと思ったから」という会話や、「カレーライスを描くのをやめて鍋にしたのはどうして？」「鍋の方が、毎日色々な給食をついだ感じが出せるかと思ったから」など



発表原稿

私がこの作品で頑張ったところは、
（例：なるべく大きく描いたところです。枠いっぱいに描いて誰が見ても見やすいデザインにしました。）
円をなるべく綺麗に描くことと、本を目立たせることです。

難しかったところや苦労したところは、
（例：〇〇をシンプルに見せるところです。色がたくさん使えなかったので何度も試作品を作りました。）
本を左右対称にしたり少し傾けたりと、見やすくなるように何度も修正を重ねました。

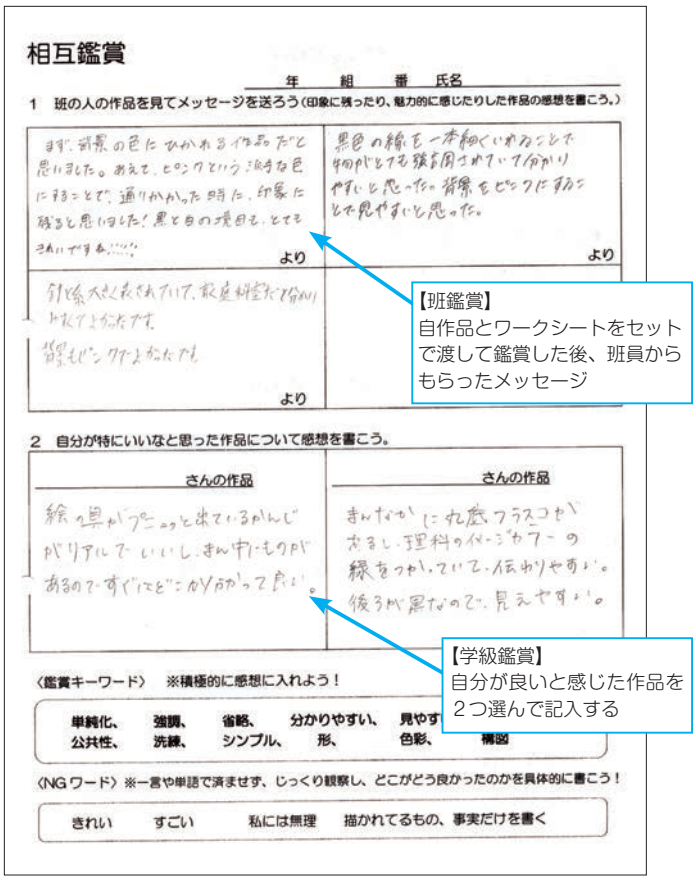
この作品で注目してほしいところ(見所)は、
（例：主役と背景の対比です。主役は黒色、背景は白色の２色を組み合わせながら主役のデザインを目立たせました。）
背景のオレンジと円になっている黒い線です。読書をしているときのほんわかとした雰囲気を灯りのように表現したいと思ってこのデザインにしました。

全体的な感想は、
（例：アイディアをまとめるのに時間がかかりましたが、試作品を作りながら何度も考え納得のいく作品ができました。）
色が１色しか使えず、なかなか自分の思うようにするのは難しかったけれど、作品の色々な所に私のアイデアを散りばめることができてよかったと思います。

この制作を通して学んだことは、
世の中にあるピクトグラムのすごさがよく分かりました。１つの線のみで意図を伝える難しさを知って、世の中にあるピクトグラムを考えた人はすごいなあと思いました。

これで発表を終わります。ありがとうございました。

図 13　発表原稿（生徒H）



相互鑑賞

年　組　番　氏名

1　班の人の作品を見てメッセージを送ろう（印象に残ったり、魅力的に感じたりした作品の感想を書こう。）

まず、背景の色にひかれるイメージだと思いました。あえて、ピンクという派手な色にすることで、通りかかった時に、印象に残ると思いました！黒と白の境目も、とてもきれいですね。　より

黒色の線を一本細くいれることで物がどこでも強調されていて分かりやすいと思った。背景をピンクにすることで見やすいと思った。　より

針線太さ、表されていて、最高傑作だと分かりやすくて良かったです。
背景もピンクでよかったと　より

【班鑑賞】
自作品とワークシートをセットで渡して鑑賞した後、班員からもらったメッセージ

2　自分が特にいいなと思った作品について感想を書こう。

さんの作品
絵の黒がプニっと出ているかんじがリアルでいいし、まん中にものがあるのですぐにとどこかわかって良い。

さんの作品
まんなかに丸感フラスコがあるし、理科のイメージカラーの緑をつかっていて、伝わりやすい。後ろが黒なので、見えやすい。

【学級鑑賞】
自分が良いと感じた作品を２つ選んで記入する

〈鑑賞キーワード〉　※積極的に感想に入れよう！

単純化、　強調、　省略、　分かりやすい、　見やす
公共性、　洗練、　シンプル、　形、　色彩、　構図

〈NGワード〉※一言や単語で済ませず、じっくり観察し、どこがどう良かったのかを具体的に書こう！

きれい　すごい　私には無理　描かれてるもの、事実だけを書く

図 14　相互鑑賞ワークシート（生徒Ｉ）

【作品・ＰＲ文】
背景を白黒に分けたのは、火を使う時の恐ろしさと楽しさを表現したかったからです。遠くからでも見えるように、パーツとパーツの間隔を広げました。

【班員からのメッセージ内容】（※図 14 より）
- 背景が白と黒に分けられているのがとてもいいアイデアだと思いました。火だけが赤いことでパッと見て目立つし、全体的にとてもわかりやすいと思います。
- 白と黒を反転させることで、鍋がよりシンプルに目立つように見えるのでいいと思いました。

図 15　Ｊの作品【調理室】（令和元年度）

【作品・ＰＲ文】
遠くからでもはっきり見えるように工夫しました。保健室のイメージが赤色なので赤を使用しました。ハートが浮き出て見えるようにしました。

【班員からのメッセージ内容】（※図 14 より）
- 遠くから見ても分かりやすく、黒、白、赤の色をバランスよく配置していました。
- 保健室にある道具ではなくハートを描いたのが良かったと思います。保健室は怪我や病気のケアだけでなく心を休める場所なので良いアイデアだと思いました。

図 16　Ｋの作品【保健室】（令和元年度）

写真３　学級内審査の様子（令和元年度）

写真４　校内鑑賞（平成30年度）

写真５　投票の様子（令和元年度）

写真６　第１音楽室（平成30年度）

写真７　理科室（平成30年度）

写真８　美術室（令和元年度）

図 17　平成30年度作品（白黒のみ）

図 18　令和元年度作品（白黒に一色加える）

という会話が聞こえた。生徒が、各自の感じ方の違いに面白さや新鮮味を感じている様子が伺えた。（31ページ・図15・16）

（b）学級鑑賞

班で発表とメッセージ交換をした後、学級全体で鑑賞会を行った。ここでは、自分がよりわかりやすいと感じたデザインを2つ選んでワークシートに感想を記入させた。その際、鑑賞キーワードを意識させ、多くの人にわかりやすいデザインのよさに注目して鑑賞するよう呼び掛けた。

（c）学級内審査（写真3）

鑑賞活動を終えた後、描かれた特別教室ごとに作品を分け、全員で投票を行った。生徒は課題である全10室の特別教室の内、自分が描きたいものを描いているため、数は均等ではない。並べられた作品の中から、作品を「他者目線」で選ぶよう指示した。

（d）校内鑑賞（写真4・5）（図17・18）

各学級から選ばれたピクトグラムは、校内に一斉に掲示した。1週間ほどの期間を設け、全校生徒や職員に特別教室のピクトグラムを選んでもらった。その際、この活動が単なる選出活動ではなく、一人一人が「他者目線」でデザインを感じる大切さを意識させた。そのため、放送による投票の呼び掛けや掲示などを積極的に行い、趣旨の理解に努めた。投票は、選んだ番号を記載する欄の横にメッセージを添えられるよう工夫した。開票後は、メッセージのみそれぞれの生徒に手渡した。

【校内掲示】（写真6・7・8）

投票後、最終選出された作品は実際に特別教室のピクトグラムとして実用化している。本校は、校舎が古く複雑な構造で、特別教室の位置がわかりづらい面がある。しかし、ピクトグラムを用いることで校内がデザイン化され、来校者の多い本校で役立っている。

【生徒の振り返り】

○今まで、色を使い、よりリアルにするのが美術だと思っていた。白黒しか使わず、シンプルに一目見てわかる絵を描くのが難しかった。町中にあるピクトグラムが面白く、興味をもった。（平成30年度）

○ピクトグラムは元々好きで、色々な所にあるものをよく見ていたので、自分で制作してみるのは面白かった。単純化することの重要性を学ぶことができた。（令和元年度）

○細かく観察して絵を描くことは何度かあったが、できるだけ単純化して狭い枠の中にどのように絵を配置するかなどを考えたのは初めてだった。工夫を凝らして良い作品になったと思う。（令和元年度）

3　研究の成果と課題

（1）成果

対話的な活動を取り入れた鑑賞活動により、生徒は自作品を最初の構想で留めず、視野を広げ、構図の見直しや効果的な配色の工夫などのより伝わりやすい表現を探求するようになった。ワークシートの記録からは、生徒が美術的な見方・考え方を働かせて鑑賞し、自分の作品を見直したり評価したりしている様子が見られた。特に導入の工夫を行った令和元年度の制作では、構想がスムーズに進んでいる様子も見られた。本実践で工夫した対話活動が表現力を高めることにつながったと考えられる。

（2）課題

今回の実践では、生徒は教師から与えられたテーマを出発点にイメージをふくらませ制作を行っていた。しかし、より高い資質・能力を身に付けるためには、自分にとって必要感のある題材を自ら発見することが重要であると感じた。そのプロセスをどのように設定していくかが今後の課題である。共同制作時における対話的な活動の工夫も含め、今後も本実践を生かしたピクトグラムを題材とした研究を続けていきたい。

なお、この実践は新潟県で開催された令和元年度教育研究発表会で発表した内容をより詳細に分析し、まとめたものである。

【参考文献】

1 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　美術編』日本文教出版、2018
2 国立教育政策研究所『資質・能力　理論編』東洋館出版社、2016
3 福本謹一・村上尚徳『中学校新学習指導要領の展開　美術編』明治図書、2017
4 田村学『深い学び』東洋館出版社、2018